

[エッセイ]

Die Verwandlung und Das Aufheben

富山侑美

「aufheben ってどういう意味？」

「止揚する、じゃないかな？」

とある日の富山邸。邸、といっても、彼とその妻と私の3人家族が住むのに広すぎず、狭すぎないマンションの一室である。私が大学院への進学を決め、ドイツ法から多くを学んできた歴史を有する日本の刑法を専攻するというのだから、入学前にドイツ語の勉強を始め、そのヒントをもらおうと、誰よりも近くにいるドイツ・オーストリア文学者の彼にこのような質問をするのも当然の流れであった。

厳密に言うと、この質問に対する答えは正しくはなかった。法律文献で aufheben が使われている場合、たとえば、裁判（判決・決定・命令）が「取消」される（Entscheidungen werden aufgehoben.）という意味や、控訴審判決の「破棄」（Die Aufhebung des Berufungsurteil.）という意味で用いられることが多いからである<sup>(1)</sup>。もっとも、中高生時代は受験勉強程度の勉強しかしておらず、大学生時代もバイトやらバンド活動やらに全神経を注いでいたといっても過言ではない私にとって、恥ずかしながら、哲学用語である「止揚」という言葉が新鮮であったのだから、大いに勉強になったことは言うまでもない<sup>(2)</sup>。無知な私の反応を見て、「止揚する、じゃないかな？」という言葉に続いて彼の豊富な教養の泉が溢れ出したことは、彼を知る者ならば容易に想像できるのではないだろうか。後に、東京都知事の小池百合子氏が、築地市場移転問題について、「築地市場の改修案も市場問題 PT から出され、百花繚乱の様相を呈しているが、ここはアウフヘーベンすることだ<sup>(3)</sup>」と述べるなど、止揚（アウフヘーベン）という言葉が社会的に若干の注目を浴びたりもしたが、結局この会話以降、「止揚」が富山邸での会話で使われることもなく月日が流れ、そして、彼はその肉体を手放していった。

富山邸はその構成員を1人失って、この会話がなされた頃よりすっかり広くなくなってしまった。しかし、それとは対照的に、こうやって何気ない会話の一節を思い出すたびに、私の心に彼が現れ、その存在の占める割合が大きくなるのが感じられる。また、彼が読んできた本や書いた物を掘り出して少しずつ読むたびに、そう思う。書き物には、公刊されたことのない学生時代の勉強ノートや雑記帳まで含まれるから、その量は膨大で、まだまだ彼の存在が大きくなり続けることが予想される。生前、家族が見ることが、あるいは本人すらほとんど手にすることがなかったような物まで次々と「発見」される様は、まるで今も彼がどこかで書き物をし続けているようである。

前置きが長くなってしまったが、この度、彼の追悼号に載せる彼の略歴・業績目録を作成する機会を頂くことになった。そこで、このように彼の業績を改めてじっくりと調べ、読むこととなった。その中で私のお気に入り、カフカに関する論文や勉強ノートである。単純に、彼が研究してきたハブスブルク家の歴史・文化や、ヨーゼフ・ロート、エルンスト・ヴァイス、ユーラ・ゾイファーやアントン・ヴィルトガンスについての知見を持たない門外漢であるのに対し、カフカの作品、特に『変身』であれば読んだことくらいはあるからというだけではない。彼が学生時代から40年近い歳月をかけて見つけてきた作家の1人であるカフカに関しては、丁寧に手書きされた勉強ノートも残されており、それらを読むことによって彼の歩んでいった道を垣間見ているような気がするからというものもあるのだ。たとえば、『変身』の主人公グレーゴルは、ある朝突然「虫」に変身するわけだが、この虫の種類を特定した上で、「この『虫』がいつ幼虫から成虫に変態したのか」ということを考察する論稿がある<sup>(4)</sup>。文学的素養を持たないために、このような視点に対し

てどのような評価がなされているかはわからないが、少なくとも、幼い頃の私に、たびたび様々な動植物に関する豊富な知識を披露してくれていたことから考えると、この視点は彼にとって実に自然な着想であったことだろう。どうやら昆虫や花に関する図鑑は、幼い彼の愛読書であったらしい。

このように、彼の書き物の中には、彼の生きてきた姿が見え隠れしている。だから、目に見えていたはずの父の存在が消滅したこのとき、確かに目の前に彼が存在していると感じている。それは今までほとんど目にする事がなかった彼の論文であり、勉強ノートであり、あるいはこうやって彼を追想することそのものによって、私にとって (für „mich“) 父として映っていた彼が、昆虫好きの少年としての、あるいは必死に学ぶ学生としての、また一人の学者としての彼自身として自立的存在として (an und für sich) 見えてくるからなのだろうか。そのためには、彼の「変身」は必要だったのかもしれない。肉体を手放されてしまったことは、娘としては本当に悲しいことではあるけれども、それでも目の前に現れた彼を想い、少し嬉しく思わざるを得ないのである。そういう意味では、私自身も「変身」している。

また、まだ私の知らない彼がきっと其処彼処に存在しているはずだ。それは、書き物の中にも、また、彼の恩師や教え子、同僚やお世話になった多くの方々の中にもある。あるいは、貴重な紙面を割かせて頂き、少しばかりではあるがこのように私が彼について書くことで、誰かにとって知らない彼を伝えることができているかもしれない。様々な人に様々な場面で思い出され語られることで、もっと「変身」するだろう。それと並行するように、彼について思い出し語る私達も「変身」していく。

彼は論文中で、『成虫』になったとき、グレーゴルは眠れない一夜を過ごしている。そこでグレーゴルが何を考えたのか、その分析はまた稿を改めて

考察したい」<sup>(5)</sup>と述べているが、彼の存在を知った「幼虫」に変身したばかりの私がいつか「成虫」に変身したとき、その答えがわかるのだろうか。あるいは、「成虫になったとき、昆虫はもうそれ以上変態することはないから、これが最後の姿であり」、「儂いものの比喩にも用いられる」ことから、「成虫こそは、その昆虫の死ぬ直前の姿」である<sup>(6)</sup>と考えている彼は、この時点ではわからなかった答えを、私達より早く「成虫」になってしまったときに得ていただろうか。

いずれにせよ、私達が彼に関して少しでも考えながら変身を繰り返している間は、彼も私達の心の中で生きているのだろう。話が最初の会話に戻るが、このように信じながら悲しみを乗り越えていくことは、彼としての父が私に教えてくれた「止揚」の一例なのかもしれない。

奇しくも、世界中が新型コロナウイルスの猛威にさらされ、我が国も緊急事態宣言という非常事態にあった中で突然亡くなった彼。マスクが手放せない社会が来るなんて、誰が予想していただろうか。大学の講義も、リモート形式の導入であったり、対面形式の場合はマイクを共有しないようであったり、何らかの変革、否、変身が必要とされている。問題はただでさえ山積みなのである。そのような時代の中でも、人と人との問題や、あるいは学問的な問題、その他様々な社会問題を止揚し、乗り越える。その大切さを「変身」した彼が教えてくれている。私はそう思いたい。

#### 註

- (1) 山田晟『改訂増補版 ドイツ法律用語辞典』大学書林（2001年）49頁。
- (2) 言わずもがなであるが、止揚はヘーゲルの『精神現象学』で多用されている哲学用語である。G. W. F. ヘーゲル『精神現象学 上・下』（熊野純彦訳）ちくま学芸文庫（2018年）参照。

- (3) 『文藝春秋』2017年7月号120頁。この小池氏の発言がきっかけとなり、「アウフヘーベン」は、「2017ユーキャン新語・流行語大賞」（現代用語の基礎知識選）の候補にノミネートされた。
- (4) 富山典彦「フランツ・カフカ『変身』の「虫」の変態についての一考察」成城文藝235号（2016年）48頁以下。カフカに関する最初の公刊論文は、修士論文を加筆修正した「フランツ・カフカ『アメリカ』—閉じない円環」であり、埼玉医科大学進学課程紀要第1号（1980年）33頁以下に掲載されている。
- (5) 前掲注（4）成城文藝48頁。
- (6) 前掲注（4）成城文藝46頁。